

## 増毛支場の在りし日に

中島 美由紀

この秋に佐々木トキ子さんの訃報を受け取った。ご家族に電話でお悔やみを伝えると、長く療養中であったが、今年の6月に他界されたという。

旧北海道立水産孵化場の増毛支場で佐々木さんとともに勤務したのは、昭和62年の8月からの11ヵ月だった。その時の支場のメンバーは、栗倉輝彦支場長のもと、佐々木さんの他に、増殖係には平野和夫係長と宮本真人研究職員、調査係に伊澤敏穂係長と私の6名に加えて、通年の守衛と事業期のボイラー管理を兼務して交替勤務する松田清二さん、佐々木さんのご主人の佐々木才吉さんともう一人の守衛さんが委託で通っていた。北海道立水産孵化場に採用された私は2ヵ月を恵庭で過ごした後、初の赴任地が増毛支場だった。ちょうど、ファックスが初めて支場に配備された頃である。増毛支場は、市街地から約7km離れており、最寄りに民家はなく、現在のように携帯電話やインターネットももちろんなく、当時はまさに陸の孤島の感があった。秋から雪解けの頃までのサケの事業期は、臨時職員が数人加わったりして賑やかになったが、サクラマスの稚魚を放流した後の夏には、支場で職員や関係者以外の他人を見かけるのは、隣接した火葬場に来る人たちくらいで、まずなかった。支場はこのような辺鄙な場所だったが、そこでの勤務は居心地が良かった。昭和62年の秋は、暑寒別川にサケが大量回帰した年でもあり、町内で孵化場のお株が上がり、なおさら良かったのかもしれない。

昭和56年から孵化場に勤務された佐々木さんは、支場で働く女性の先達だった。親子ほど年が離れていたこともあり、様々なことを語って下さった。増毛支場に勤務する以前は、北海道立増毛病院で仕事をされていた。病院の移管に伴い、地元で働ける職場を希望して孵化場に勤務するようになったという。佐々木さんが病院勤めを始めた頃は、地方では看護師以外の女性の正規雇用が珍

しい時代だったそうで、いろいろな経験をされて、ご苦労もあったようだ。が、昔のことは何であれ愛おしむように話してくれた。いつか、何があっても仕事を続けることが大事と諭されたことがある。仕事には良い時も悪い時もあるが、継続しなければ次はない、小さなことも積み重ねがあれば、あとで活かされるというのである。採用されたばかりで何もできない新人の私に対して、佐々木さんはじめ栗倉支場長や当時の職員は快く見守って下さった。特別扱いなどがなく増殖事業にあたらせていただいたことは、後々の業務を行うのに役に立った。

佐々木さんは、平成3年に孵化場を定年でご勇退され、送別会が恵庭で行われたという。当時の私は森支場にいて第一子が生まれたばかりで参加できなかった。そのお詫びをご本人に電話すると、増毛支場の勤務経験者が集い、送別会というよりも皆に再会できて、とても嬉しく楽しいときを過ごされたと同ったのを憶えている。

その後、平成12年に増毛へと私は2度目の赴任をした。もう、佐々木さんはご主人の才吉さんと悠々自適の生活に入っておられた。私は二人の子を連れての再会となり、佐々木さんご夫妻はとても喜んで下さった。ちょうど公宅の立て替え時期で、佐々木さん宅の向かいの空き家を借り上げて住むことになり、子供たちともども随分とお世話になった。

佐々木さんの知らせを聞いて、晩秋の旧増毛（道北）支場を訪れた。構内は無人事となり冬の豪雪の爪痕が見て取れ、あの頃の整然とした佇まいはもうない。佐々木さんとサケの直後卵を立体式孵化器に収容したり、実験室で鱗の年齢標本を作成したことに思いを馳せ、そうっと手を合わせた。

(内水面資源部研究主幹 なかじまみゆき)